

土筆を摘みに行こう

文・絵 里山 景

友から土筆を摘みに行こう、という誘いの電話があった。

「えっ、摘んでどうするの」

「煮て食べるのよ。決まっているでしょう。」

「食べられるということは、知っているけれど食べたことないわ。」

4月ののどかなある日、東急線「たまプラザ駅」で友達2人と待ち合わせた。駅前には桜並木だ。満開は過ぎて、桜吹雪となっていて、道路の橋に花びらが積もっていた。

多摩川の土手あたりで摘むのかと思っていたならば、ある花農家の畑のなかだった。

「この中にやたらと入っているのよ。」

「ちゃんと断っているから大丈夫よ。それに私はここのお得意さんだから。」

そういえば彼女から芍薬の花をたくさんもらったことがあった。この畑の花だったのだ。

生えている、生えている。畑一面にツンツンツンと。とる前に友からの注意あり、

「頭が青いのを選んで取るのよ。白くなって開いているのは硬いからね。」

「土筆の頭って煙が出るからちよつと、いやよね。」

「その頭が一番おいしいのよ。料理したのを持ってきているから、味見さしてあげる。」

手のひらに載せてもらう。初めて食べるけど、どんな味がするのかな。ちよつと苦いが意外と美味しい。

「袴を取ってさっと洗い、油でいためて、酒、みりん、しょうゆで味付けして出来上がり。簡単な料理でしょう。さあ、たくさんつまみましょう。」

足の踏み場もないほど、はえている。青い頭を選びながら、手は早くなる。



取るということは楽しいことだ。瞬く間にビニール袋はいっぱいになった。友の説明がまた始まる。

「土筆にかぎらず、苦いや辛い植物は活性酸素からの害を減らしてくれる。だから春にふきのとうや山菜を食べるのは、体にいいことなのよ。」

元小学校の先生だけあって、説明がわかり易い。説明はまだ続く。

植物は1日中紫外線を浴びているから、自分の身を守るために、苦くなったり、からくなったり、渋くなったり、するそうさ。そして土筆など食べると、老化やがんなどを予防してくれるという。年齢とともに、そういう野菜がすきになつてきたようさ。

川崎市王禅寺あたりは、自然が豊富にあり、里山は新緑のなかに、椿や花桃や八重桜が溶け込んで、美しく、心が洗われるように気持ちがい1日だった。

土筆は足が速いから、今日のうちに袴を取って料理したほうがいいと言われていた。夕食後はテレビをみながら、1時間以上もかけて袴を取った。あくで爪が黒くなった。

友に言われたとおりの調味料で味付けをして、すぐできあがった。なかなかいい味だ。

長女に食べさせると、粉っぽくて美味しくないといった。次女に聞いたら美味しいとパクパクたべた。夫に勧めたらみるなり、「雑草なんか食べられるか。」と、怒った。

夫や長女が嫌いでも、私は美味しいので、

「毎年春は、土筆摘みに行こうよ。」
と友達に提案した。

体内の活性酸素を退治してくれて、がんや老化防止になるのだから、こんないいことはない。

